

## 首里城扁額製作検討委員会（第1回）議事要旨

日時：2021年8月13日（金）13:30～15:30

場所：WEB会議

### 1.首里城正殿扁額製作に向けて

- ・首里城正殿2階空間を彩る象徴的な展示物であり、中国との関係性を示し、琉球の工芸技術を駆使した物である。前回の成果を踏まえて、新しく確認された資料も取り入れながら3枚の扁額を製作できるよう進めていく。

### 2.実施体制について

- ・委員会・ワーキング・ミーティングでの検討体制については了解を得る。
- ・ミーティングの新たな知見について、尚家文書には扁額の大きさ等、様々な情報が記録されているので、ワーキングでの議論の参考にできるよう、そこから抽出できる基本情報をあらかじめ整理しておく。
- ・扁額の文様について検討する際、中国扁額に知見のある有識者をワーキングやミーティングに参加していただくのがよいと考える。
- ・委員会、ワーキング部会同様、ミーティングについても委員が参加する方向で調整する。
- ・ミーティング、ワーキング等のスケジュールは、分析の進捗状況等を踏まえて検討する。

### 3.前回製作時の経緯と問題・課題

- ・前回の製作は、18-19世紀の琉球扁額事例に基づいて額縁様式を設定したが、今回は中国の扁額様式を踏まえて大きく見直す可能性があると考ええる。
- ・「尾崎資料」では額縁の幅が一尺で龍蛇を彫彩との記述がある。また、中国使節団が正殿扁額を礼拝することから、中国様式にふさわしい装飾だった可能性が高い。別で中国宮廷衣裳の龍文を調べているが、様式が定められている傾向がある。
- ・文字に関しては、中国系の多い久米村から人々の動員もあったことや、中国皇帝が御書を提供していることもあるので、中国様式というのは視野に入れた方がいい。
- ・前回（「輯瑞球陽」「永祚瀛壖」）製作時、額縁と地板を別々に製作していたが、額縁の上塗りを終えた後に額縁を動かそうと一角だけ持ち上げたことが原因で、額縁がしなっって漆塗装にひび割れが生じたのではないかと思われる。今回製作では、ワーキングでその点を踏まえ繰り返すことがないように、製作方法を検討していきたい。
- ・前回製作時のひび割れについて、幅3cmもなく1cm程度だった。長さは額木の継ぎ部分に沿って割れていた。

- ・前回製作時、扁額の裏面は掻き合せ塗りのみであったが、耐久性等を考えると、裏面も布着せ・布目摺りをきちんと行う方がよい。
- ・漆塗については、材料等も含めてワーキングで詰めていきたい。
- ・木材について県産材を使用したいが、柾目が取れる幅広の木は減多にない。木材の大きさが足りない場合、小さな材を接ぎ合わせて大きく作ることも可能である。しかしその場合は髹漆の刻苧彫り作業が増えるため、樹種に関して総合的に検討する必要がある。その作業を行う木工職人は県内に数名いるので、県内で木地製作を実施してほしい。
- ・樹種について尚家文書で、イヌマキとの記述がみられる。今回の樹種の選定では文書の記述をどう扱うかも検討が必要となる。
- ・咸豊四年の文書で、彫刻の際、取り外さないと困るので、木材の抜き差しが出来るような仕様にするように、といった記述があるため、彫刻されていた可能性が高い。

#### 4.新たな知見の概要と分析について

- ・尚家の御筆扁額は、尚泰王代に咸豊帝より提供されたものである。尚家資料の活用については、康熙・雍正・乾隆の3枚の扁額と、咸豊帝の扁額の整合性をどう考えるかが重要な論点となる。ミーティングチームで早めに情報のすりあわせをしてもらう必要がある。
- ・尚家文書には寸法や材料に関する情報が含まれているため、その情報を早めに確認・開示し、新たな知見ミーティングでの検討も早い方がいい。
- ・尚家文書には例えば、「文字彫刻は乾隆帝、額縁は康熙帝、地板寸法と額縁寸法は道光帝の扁額を参考にした」とあり、扁額には時代それぞれに特徴があったことがわかる。今回の製作で、尚家文書すべてにならうわけでないとしても、前回製作とは異なる手法を参考にするという点で、早めに尚家文書の情報整理をしてもらいたい。
- ・尚家文書に関しては、今回の分析候補以外、特に扁額に特化した文書はないと思われる。一方で、中国側の扁額の参考事例を集めた方がよい。皇帝扁額は九龍がスタンダードであれば、九龍に変える等の変更が伴うはずである。
- ・前回製作時に委員だった池宮正治先生が、首里城研究 2 号で扁額についてまとめているため、参考にしてほしい。

#### 5.その他（製作スケジュール）

- ・正殿復元の方では、技術者の確保・育成は技術検討委員会でも議論中。前回職人を踏襲しつつも、さらに県内職人を確保する方針。また、正殿本体工事は本格的には令和5年度に着工予定で、彩色彫刻工事は令和6、7年度頃になると思われ、彩色彫刻については正殿側と扁額側とで整合をとった形で進めたい。
- ・額縁に彫刻を施すとなると、前回製作時よりも製作工程期間がずっと長くなることが想定されるため、十分配慮してほしい。

- ・扁額と正殿本体の工程とは資料を見る限りバッティングもなく、令和 5 年度内に扁額が完成できれば、関わった職人はそのまま正殿工事にシフトできる。県立芸大の卒業生を含めて若い職人の育成にも貢献できる事業なので、ぜひ県内の人材を活用してほしい。
- ・県産材は乾燥期間を考えると、現在あるストックを使用した方がよいと考えている。
- ・木材に関しては、材料調達と乾燥までの時間をしっかりとってほしい。特にイヌマキを使用することになる場合、丸太ではなく板状にしてからの乾燥がとても重要となるため、早めに樹種の方向性を検討したほうがよい。
- ・正殿が完成して扁額を設置するまでの間、先に完成した扁額については、沖縄県立博物館・美術館で公開展示するほうがよい。間近な距離で見られる貴重な機会となる。